医学図書館における 利用統計の問題点について

特集：医学図書館統計

菅 利 信*

はじめに

統計というのは、図書館統計にかぎらず報告の為の統計ではなく、利用出来る統計であることが条件である。その為に、図書館統計の作製者は、図書館現象のあらゆる方面に何時でも報告出来るように、組織と工夫をすると共に、どんな事柄について、どんな風に統計をとり、どんな統計資料を準備しておくかならなければならないかについて、常に研究しておく必要がある。まず統計表は、表の作製が出来るだけ簡単に、かつ容易であり、そこに現われている数字そのものも亦容易に読みとれることが必要条件となる。このことは単なる抽象的な議論ではなく、すべての角度から計数的に、明らかにしなければ、到底近代的な図書館経営をすることは出来ない。

図書館統計といえば、何時も一般的な蔵書統計、閲覧統計ばかりが問題になり、経営統計は今迄軽視されがちであった。現実的には図書館統計は、すべて経営統計であるが、蔵書統計や、閲覧統計は図書館としては中止することの出来ない性質のものである。日本医学図書館協会の統計も、第33回弘前の総会に於いて、山口大より提案された統計の改訂は、利用出来る統計にする為には至当なことであった。統計様式は、第35回総会に於いて、若干の変更があったが、いまだに不備なところがあり、第37回総会時には、アンケートをとり統計各項目についての要望を調査

した。

第37回総会時の統計を利用してみて、問題になる点を若干あげてみると、下記の項目について問題が出てきた。

医学図書館統計の改訂すべき点

I. 館名について

館名については別に問題はなく、しかし創立年のとりかたに疑問がある。例えば安政1年創立という館があるが、これはどうであろうか、本邦の図書館史でも調べてみればわかると思うが、こういうのは備考欄に補足説明すれば良いのであり、現に京都大学図書館や、北里大学図書館の例があり補足説明することが望ましい。やはり創立は、大学の制度上公式に認められた年か、常識的に図書館として認められる施設が最初に記録された年を記入するのが妥当である。従来は明らかに大学の創立年と思われるものがある。病院、研究所を母体として創立された大学の場合は、その前身時代の図書館の創立年をとる。若しこれが困難ならば、備考欄に前身時代の沿革を略記する。以上のことから考えて、図書館の創立には、次の2案があると思われる。

1. 大学の制度上公式に認められた年。
2. 常識的に図書館として認められた施設を最初に持った年。

又、現統計をみると、分館の制度が全然わからない。進学課程を持って分館制度をとっている大学も多いと思われる故、これをぜひ

* Toshinobu SUGA 東京医科大学図書館

統計に入れてほしい。記入例は本館のすぐ下に、例えば

A医科大学図書館 大正3

" 分館 昭和25

ようにしたらどうであろうか、ぜひお願いしたいと思う。

II. 建物, 施設

現在の項目にある「その他は除外してもよい。もし「その他」をもうけたら必ず備考欄をもうけて記入させるようにする。又、座席数は、現在閲覧用として提供している座席数をとるべきで、書庫内キャレルは内訳として記入すれば利用する場合わかりやすい。

III. 館員

専任職員の経験年数の項目で、経験年数は、医学図書館に勤務した経験年数なのかどうか疑問になる故、経験年数は国内外をとわず図書館及びこれに準ずる施設で業務に勤務している年数とすれば、一そう経験年数の項目がはっきりすると思われる。

IV. 蔵書(a)

この項を利用してみて、各館の調査不明とか、その他は備考欄に記入してもらわないと利用する場合は不便になる。蔵書の項目において、不明とか調査不明とかは、図書館の統計としてはあまり良い記述方法とは思われず又、蔵書に関して調査出来ないことはおそれないと思う故、統計作製者の親切心がほしい。

蔵書(b)

この項目で問題になるのは、カレント和洋雑誌についてである。現在各館で雑誌として取扱っているものに、一定基準をもうけることは絶対必要である。Title 数の非常に多い館と少ない館との差がはなはだしいのは、一体何を基準とし、雑誌として取扱っているのか疑問が出てくる。やはり基準として Check する Tool が必要である。例えば Biomedical Serials, List of Index Medicus, New Serial Titles, Vital Notes on Medical Periodicals, World List of Scientific Periodicals, World

Medical Periodicals, 医学中央雑誌等によることが望ましいと思う。特に問題になるものに、Advances, Colloquia, Ergebnisse, Progress, Symposia, 年鑑, 統計, 新薬集, 人口動態統計等がある。又、単行書より雑誌に切替する場合も必ず基準とする Check list に Check してから切替すれば或る程度の混乱は避けられると思われる。

V. 経費

(a) 大学費総額対図書費総額及び維持費等

単科大学の場合、大学総経費、図書館費は問題なくすぐ記入出来るが、総合大学の場合は、大学総経費、医学部経費、図書館費とすれば記入しやすくなると思う、これは各大学にとってさほど困難なことではなく、統計に空白が出ることもなく、利用するとき便利であると思われる。この項の目的は大学総経費の何%が図書館費として計上されているか調べるのが目的である。とすればもう少し定義をはっきりさせて、わかりやすくしたほうがよいと思われる。人件費の計算は問題ないが、維持費の中で「その他」の項目の内訳を備考欄に記入させる。この項は、国立大学の規定を転用したほうがよいと思われる。

(b) 図書購入費

記入していない館が相当あるが、記入出来ない場合は、備考欄に記入させる。各館の内部事情もあって記入出来ない館もあると思われるが、図書館にとって重要な項目であり、備考欄も利用しぜひ記入するようにしていただきたい。又、増額分の項目をもうけたらどうでしょうか、例えば、A館昨年1,200万で本年1,500万とすると、比較する場合昨年度の統計を見なくては比較することが出来ない。利用する場合参考になるとと思われる。

VI. 利用

利用対象人員を毎年利用人員と誤解する館がある。学生の数にしても或る加盟館の場合学生数4,250名もいる館がある。これなどは、医学部1学年の定員60~100名としても

全く新入館員には理解にくるしむことになる。備考欄に記入するのは当然と思われる。これは総合館の場合であるが、それならばその中医学部学生何名と備考欄に記入すべきである。職員にしても現在の定義をより明確にしてほしい。又、開架については、完全開架のみにしたらどうか、閲覧室のみ開架とか色々あると思うがその他備考欄に記入させる。

相互貸借、複写

現在加盟館が行っている相互貸借で、加盟館以外の館との相互貸借を()に入れて発表して貰いたい。又、謝絶について各館で年間何件位あるかも発表して下さると統計としては大変興味深いものになる。

VII. 整理

分類、目録、目録形態には別に問題がないが、各館が使用しているローマ字をつけ加わえることを提案します。ヘボン式か、訓令式か、これは統計としては、どうかと思うがつけ加わえれば便利である。

VIII. 出版物

これは統計の項目としては全くおかしい。これは統計とは別に調査すべきである。若し統計に入れるならば、その機関の代表するものだけに限定すべきである。又、大学で編集しているものだけか、図書館で編集しているものだけかはっきりきめるべきである。

以上現統計を利用してみて、若干の問題点を上げてみたが、いずれの項目をとっていても定義があまりはっきりしていない。現統計は、なんでもかんでもつめこみすぎた感がありもう少しすっきりした形にしてほしい。統計を見れば、医学図書館加盟館がすぐわかるような形式が無難なところと思う。

又、追加項目としては、Reference を入れてほしい。第 36 回総会時の承合事項で参考係において、Reference を実施している館が相当あり、参考統計も当然とっていると思われるのでぜひ追加項目として入れてほしい。

他の図書館統計と比較して

文部省で毎年調査する学校基本調査附属図書館調査表の項目と比較すると、調査表のほうは蔵書の区分のみ詳しく、医学図書館統計と比較することは無理であった。

日本図書館協会の図書館調査(大学図書館)と比較すると、これまた簡単すぎて無理であった。

昭和 41 年度に行われた、昭和 41 年度大学図書館実態調査表(文部省)と比較してみると、実態調査はあらゆる大学を含む調査表なので、医学図書館の承合事項のようなもので含んでいる。調査表 I は、医学図書館統計と大差はないが、II の総括事項は相当詳しくなる。これは相当に参考になり医学図書館協会でも 4~5 年に 1 回は実施していただきたいと思う。III の個別事項は別に問題がないが、E の教員及び職員学生数は医学図書館統計にとっては参考になる。施設では医学図書館統計も 4~5 年に 1 回はこの形式を採用してほしい。経費の項では医学図書館統計でもこの方法をとればよいと思われ、国立大学の場合の記入方法は、別に詳しくあり大いに参考になる。蔵書構成では、最近 5 年間の図書、雑誌受入数がある。その他の項目は医学図書館の承合事項のようなものである。以上国内の調査表と比較してみたが、医学図書館にいえることは、4~5 年に 1 回は文部省の実態調査表のようなものを実施して貰いたいことである。

Medical School Library Statistics との比較

これは、Bulletin of American Medical Library に掲載された論文である。

A. Institutional Data

1. 大学名に関しては別に問題なく、学生数の内訳は、医学生、看護学生、薬学生、その他となっている。

2. 教職員は Full Time と Part Time に

わかれている。

3. 収入の基礎は, Private, City, State, Federal の4種にわかれている。

4. 経費に関しては, Research, Grants, Library Budget, Librarygift & Endowments にわかれている。

B. Size and Growth of the Library Collection

1. Book と monograph は Number Added と Total Number にわかれる。

2. Bound Periodicals は上記と同じにわかれている。

3. Volumes は, Total と Grand にわかれる。

4. その他として Manuscripts, Microtext materials これは, Films, Filmstrips にわかれる。

その他 Audiovisual materials, slides, Motion Picture, Sound Recordings.

この項目の最後に Serial Titles Received と Serial Titles Received for Duplicate Sets がある。

C. Library Expenditure

この項では, Books, Pamphlets, Microfilms, が1項目, Periodical Subscriptions が1項目, Periodical Back Files が1項目, その他 Supplies & Equipment, Binding, Miscellaneous Expenses, が各1項目あり, 最後に Total がある。

D. Personnel (Full Time Equivalent)

これは, Professional Librarians, Library Assistants, Students Assistants, の3種にわかれている。

E. Personnel Remuneration

これは Head Librarians Salary が1項目あり, その他 Professional Librarians, Library Assistants, Students Assistants の給料の額(高低)が記入されている。

F. Circulation of Materials

この項目は, Books, Periodicals and Interlibrary loans が1項目, Microtext と Au-

diovisual materials が1項目, Reserve Collection が1項目, Interlibrary loans が内訳として Lent と Borrowed にわかれている。

G. Reference Services

この項は, Bibliographies, Compiled Verified として1項目, Research Request が1項目, Ready Reference が1項目, Translation が1項目となっている。

H. Library Hours

これは別に問題なし。

以上各項目について述べてみたが, A項においては, Budget の記入方法が利用する場合良いと思われる。B項においては, 別に問題ない。C項は医学図書館統計としてこの形式が良いと思われる。この中で Periodical Subscriptions などは興味ある項目である。

D項は別に問題ない。

E項の給料の項目であるが, Professional, Library Assistants, Students Assistants, Head の給料の高低の記入などは仲々興味があり面白いと思う。日本医学図書館協会でも一度実施してみたらどうでしょうか。

F項は別に問題ない。

G項の Reference Services は医学図書館統計では必ず実施してほしい。

H項は別に問題ない。

Descriptive Data : Selected Medical School Libraries の比較

これは Journal of Medical Education に掲載された 17 の Medical Center Library の記述であるが, 統計の方法が仲々興味あるものである。表1~4は普通の統計と変りないが, 表5~8は, 財政, 蔵書数, 購入, 給与等の Rank 別の統計表であり, 各館の Rank がわかり仲々興味深いものである。日本医学図書館協会でも3~4年に1回か, 4~5年に1回は, このような Rank 別の統計を作成してみれば, 所蔵館の Rank がわかり種々の調査に便利である。ぜひ実施していただきたい。

又, Keenan が述べているように, 基本的な統計以外は毎年変更してもよいし, 又, 変更するのは当然である。

結 論

日本医学図書館協会の統計は, 各種 Data をおしこんだ感があり, 一見白書のような感じをうけることがある。これはよいことであるが, 統計はもう少し Simple に主任司書だけのものでなく, 医学図書館の新館員もわかるようにしていただきたい。Data を合理的に, 調整処理し, 単純化し, 部分を通じて全体を類推するに役立つ統計の目的を充分に考えてやればよりよい統計になる。そのためには, Stanford 大学の Weber が編集したよう

な Definition for Library Statistics のような Draft guide を作製していただければ非常に良いのではないだろうか。

<参 考 文 献>

- 1) 小畑 渉: 図書館の統計. 京都, 蘭書房, 1953.
- 2) Keenan, E. L.: Medical School Library Statistics. Bulletin of the Medical Library Association, 52 : 386~409, 1964.
- 3) Guidelines for Medical School Libraries. Journal of Medical Education, 40 : 55~60, 1965.
- 4) Keenan, E. L.: Medical Library Statistics. Bulletin of the Medical Library Association. 53 : 196~203, 1965.

東 西 南 北

Verner W. Clapp (元 CLR 会長) 退職す—図書館員の中の図書館員—

Council on Library Resources の会長として 10 年間図書館界に想像力に 富む熱情と 骨 折りを惜しまなかった Verner W. Clapp 氏の退職に対し, NLM 館長 Martin M. Cumming は要旨次のような賛辞を呈した。

「NLM は幾度もクラップ氏の鋭い忠告と 援助の恩意を受けてきた。中でも 1958~60 年における NLM の索引機械化への CLR 援助についての氏の擁護は, Current List of Medical Literature の機械化による編集方法 実施を可能にした。それ故 NLM はその後の はるかに複雑な MEDLARS 開発に対する刺 激を受けることができた。クラップ氏は, 既 に第二の時代に入ろうとしているよりすぐれた電子装置を利用する文献分析と検索計画の 最初の主動者にランクされるだろう。Asso-

海外ニュース

ciation of Research Libraries は「図書館員 の中の図書館員」とクラップ氏の図書館学と 学問への生活を通じての献身に対して賛辞を 呈したが, NLM もまた氏の永続的で大きな 業績に深甚な感謝を申しのべるものである」。

(NLM News 22 : 8 '67)

Handbook of Medical Library Practice (第 3 版)

刊行は 1969 年春に延期

「Handbook of Medical Library Practice 第 3 版」はその構成内容が支持されたにも拘らず, 1968 年秋の提案締切に応じられないため, 刊行は 1969 年の春まで延期された。第 2 版は絶版となっているが, ゼロックス・コピーが University Microfilm (Ann Arbor Michigan) から約 20 ドルで入手できる。

(MLA News 22 : Aug. '67)

海外ニュース

東 西 南 北